

# 清華大学附属中学紅衛兵の 100 日間

## ——ある紅衛兵の発起人の回想録——

文／閻 陽 生      訳／閻 小 妹    上 條 和 恵

### 1. はじめに

「清華大学附属中学紅衛兵」は、中国の紅衛兵運動の歴史に残る名である。ただしいわゆる清華附中紅衛兵の活動期間は、わずか100日にすぎなかった。それは1966年5月29日に北京郊外の円明園での命名をもって、学校当局との全面対決、6月24日に工作組に反対する「造反精神万歳」（造反には道理がある）の壁新聞、8月1日毛沢東からの返事、更に8月18日に天安門で毛沢東からの接見でピークを迎えたが、後8月27日に「暴力恐怖」の中で「10項目の点評」の発表によって紅衛兵の主流から離脱し、あっという速さで衰退していった。

しかし、この100日間の清華附中紅衛兵活動は中国全土の若者を巻き込み、世界を震撼させたことは事実である。歴史的な時と空間を超えて、1966年の清華附中紅衛兵の100日間に焦点をあてて振り返ってみる。

### 時代背景と前兆：エリート達が競う合う清華附中

1966年、国内経済が全体的に好転するにつれ、党内に鬱積していた問題が水面上に出てきた。毛沢東は、フルシチョフのような人間が我らのまわりにおり、さらに教育の分野においてブルジョア知識人による学校支配という状況をもうこれ以上続けさせてはいけないと言い出した。

当時北京の西郊外にある清華附中（中高一貫校）では、毛沢東の考え方と正反対の教育改革が進められていた。万邦儒校長はいままで北京にはなかった予科（大学準備）コースを創立し、2回卒業生を送り出し、清華附中は北京市の中高生運動会において、4種目の中で優勝を3つ勝ち取ったことだった。

北京市の他の中学が全て北京市教育局の管理に属していたのとは違い、清華附中は清華大学の直接管理下におかれていた。予科コースの教材は清華大学が編纂し、主要な科目は清華大学の講師が担当した。予科に入学するということは、半ば清華大学に入学できると約束された。当時、清華附中で学生のクラス編成と学生番号はすべて成績順で並べられ、学生が信じていた個人競争意識をさらに強められた。

清華附中の所在地は、清華大学など8大学と高等軍事大学に囲まれ、高等教育機

関の知識人家庭の子弟と、党と政府機関のインテリ幹部の家庭の子弟が中心であった。この二つのグループに共通する考えがあり、それは個人の力を信じること、権威への蔑視であった。

高校2年の幹部子弟、楊盤、閻陽生、鄭桃生、張承志は「紅纓」（革命時、槍につけた赤い房）学習グループを作り、飛び級で大学入試に臨んだ。そのため、難問の解説と時事弁論をのせた手書きの新聞を作った。ほぼ同時に、教授子弟を代表した高校2年の周舵らも手書きの新聞を作った。その内容は難しくて遠まわしの表現が多くて分かりにくいものであったが、教授子弟たちに人気があった。

清華附中の周囲は、義和団など過去の戦乱により、荒れ果てた廃墟のような円明園と清華園に囲まれ、西洋的な競争心と個人主義の雰囲気は漂っていった。後に有名になった映画評論家の方位津は、廃墟のような円明園の環境は両派の共通の土台であると考えた。そこは学校の政治教育と労働訓練の基地が設置され、学生が早朝読書をする秘密裏に集まる拠点にもなっていた。

清華附中の管理職の多くは、ブルジョア階級と中華民国の旧官吏出身のため、当時市内の中高で「四清」（社会主義教育運動）は、彼らを震撼させた。1964年から、厳しくなる政治情勢の流れにのって、学校側は幹部子弟のために「学習班」と「軍事訓練隊」を作った。こういう幹部子弟への特別配慮は結局一般市民と教授子弟の反感と不満をもたらした。その年ある偶発的な同級生の喧嘩が、全校の「下級政治路線」<sup>1</sup>大論争に発展した。万邦儒校長は、婁埼（一般市民子弟）と熊剛（幹部子弟）の喧嘩を「幹部子弟への暴力」の「階級路線闘争」にまで引き上げたため教授子弟に不満を抱かせた。両派の壁新聞はお互いに譲らず学生食堂の半分を埋め尽くすほど貼りだされた。

最後には、学校側は強引に両者とも誤りを認めさせ、騒ぎを静めたが、こういう「身分」の隔たりは学生を二つの派に分けた。各クラスの共産主義青年団支部の組織拡大も両派の闘いの場となった。たとえば、その後紅衛兵の主なる発起人の王銘の入団は紆余曲折を経て、党中央まで訴えるところだった。鄭光召の記憶では、「両派は各自の主張を述べ、お互いに妥協しなかった。他のクラスの生徒もみな私たちの教室に雪崩込み「観戦」した。最後には挙手で採決し、一票でも足りないとい入団は許されなかった。」

## 2. 1966年5月中旬から6月中旬（創立期）：学校教育方針への反対

【主なる事件】5月29日円明園にて紅衛兵発足。6月3日最初の反学校側の壁新聞、6月8日清華附中に押しよせる他の学校からの声援。

1966年5月中旬毛沢東が議長を務めた党中央政治拡大会議で『五・一六通知』<sup>2</sup>を採決し、中央文化革命小組を設けた。5月25日に北京大学の教師聶元梓などが、学長の陸平を名指しで批判した壁新聞が貼られ、学校における文革の序幕を切って落とした。

## 5月中旬：学校当局に対して両派が対抗する

ほぼ同時に清華附中も抽象的な文芸論争から学校の教育方針への批判を開始した。最も目立つものは予科 651 班の幹部子弟である駱小海の壁新聞だった。学校当局に対する公然の質疑は学校側の緊張を引き起こし、「予 651 思想」と呼ばれた彼に学校側は生徒を動員して反論した。

当時学校の卓球クラブ長・仲維光の回想によると、「わたしたちと高校 631 班の教授子弟・鄭光召、宋海泉、戴建中何人もグループを形成し、よく一緒に相手側の動向を模索し、対策を相談し…彼ら幹部子弟と水面下で敵対していた。」当局を支持する声が圧倒的な優勢を占めていた。

ト大華の記憶では、この時清華附中党支部は「問題のある学生」のリストを清華大学党委員に提出しており、警察の派出所にも書類を作らせていた。学校の党幹部はリストに載せた学生の家庭を訪問し、1957 年の反右派闘争の例を挙げて、親に子供を管理するように勧告した。

1966 年 5 月下旬、学校側の圧力と学生の孤立により、学校当局に反対する何人の中核メンバーは、高校生の中で秘密に連絡を取り合った。仲維光の記憶では、彼らは寄宿舎の消灯後円明園に駆けつけ密かに会い、どのように反対運動を盛り上げるか、学校当局の反党、反社会主義の言動をどう暴きだすかについて相談した。彼らは真夜中にやっと宿舎にもどった。庶民家庭の子弟は、以前から幹部子弟の横暴さに不満を抱き、彼らが学校当局に反対する計画を企てているのを聞きつけると、すぐ学校当局に報告した。この時学校当局は自分たちを護るために、こういう庶民家庭の子弟を見方にするしかなかった。

## 5月29日：紅衛兵誕生

あの頃の円明園は、果てしない稻田と落ち葉の中に遺跡があちらこちらに散在し、夕日に照らされて、ある種の悲壮的な使命感をもたせられていた。今思うと青春真っ只中にいた学生たちが、学校の裏の「秘密の花園」である円明園をデートの場所とせず、学校当局の反対運動を計画する秘密の基地にしていた。

紅衛兵の誕生時期に関して国内外とも、ほとんど 1966 年 5 月 29 日だと認定している。「5 月 29 日の午後、円明園で各班の異なる政治見解の違う中堅メンバーが集会を開き、正式に「紅衛兵」の署名を採決した」と駱小海は述べている。鄭光召は、「5 月 29 日に一部の幹部子弟が学校の壁一つ隔てた円明園での集会で紅衛兵を誕生させた」と述べている。

しかし、何人かの紅衛兵の主要な創立者たちは、これに対し同意はしていない。ト大華によれば、「あの日は、明確には紅衛兵を組織しなかった、重要なことは行動を統一することだった。」王銘によれば、「それはかなりゆるやかなもので、共通の政治思想がある数人の集りだった。」

いまのところ、最初の記録としては宋柏林の 1966 年 6 月 3 日の日記である。「…昼、私たち「紅衛士」の一部の闘士は円明園に行き会議を開き、正式に組織を立ち

上げ、反撃計画を立てた。」しかし、このとき「紅衛兵」と署名した壁新聞はすでに貼り出されていた。

紅衛兵の名称の出所に関し、張承志の日本で出版された本の中の回想では「私がクラスで書いた壁新聞の署名は「紅衛兵」であり、さらに赤鉛筆で馬に乗った兵士のマークを描いた。」筆者はこの「紅衛兵」の絵をはっきりと覚えているが、「紅衛士」についての記憶はない。

筆者の記憶では、5月29日は各クラスの反対派統一行動の意見をまとめる会議だった。6月1日の夜円明園で会議を開き、統一名称として張承志の壁新聞の署名「紅衛兵」を正式に採用し、この名称で壁新聞に張り出すことを決定した。各班の代表は、5月29日を「紅衛兵」の成立日と定めた。それは第一に、あの日が初めての統一組織会議であり、第二は、私たちの行動は6月1日の人民日報に発表された北京大学の聶元梓の壁新聞より前であったという自負の念があったからだ。

## 6月2日：紅衛兵署名の壁新聞

6月2日、紅衛兵署名の「プロレタリア独裁を断固守ろう、毛沢東思想を断固守ろう」の壁新聞が5階の大教室に張り出された。公然と立場を表明した壁新聞のスローガンは学校当局に対して鮮明に戦いを挑んでいた。

…ブルジョアのおえらいさん方、おまえらがこの戦いを挑発したんだから、それはけっこうなことだ！われわれは来るものは拒まない、徹底的にお相手しよう、毛沢東反対陣営の旗手を倒さなかったら、反動組織をたたきつぶさなかったら、反動組織の拠点を打ち壊さなかったら、決して兵を引上げて戦いをやめないぞ！

紅衛兵 1966年6月2日

この壁新聞の下の方には紅衛兵の中心メンバーの署名以外に、大きな空白が残っていた。それは壁新聞の主張に賛同する人の署名用のものだった。その日、この壁新聞に記名する人は100人余りになった。但し、学校当局を擁護し、紅衛兵を糾弾する壁新聞もすぐさまにその周りに貼り出され、多くの署名があった。

その後工作組<sup>9</sup>の組長・劉晋の記憶によると、「学校当局は緊急会議を召集し、学生を動員し、壁新聞を書かせて反撃に出た。そのため、数十人の学生で結成した「紅衛兵」組織は孤立した状態に置かれた。」しかし、当時学校の党支部長・韓家鰲の記憶では、「紅衛兵の行動はわたし達にとってはあまりにも突然で、誰もどうして良いか分からなかった。これはいったい何事だ？わたしたちは、ただ一部の幹部子弟が騒いでいると理解した。彼らは何が企んでいるのかと分からなかった。」

紅衛兵の壁新聞に署名した多くの者は、知識人や個人経営者などの自由業家庭出身の学生であり、学校当局を擁護したのは、多くが共産党や共産主義青年団などで責任者に務める幹部子弟だった。当時、中学2年生の史鉄生は片耳が大きく片耳が小さい漫画を描いて、紅衛兵の偏った考えを風刺した。この漫画は校長にひそかに激励され、描かれたという。

しかし次の二人の参戦が孤立していた紅衛兵に大きな後押しとなった。一人は、

学校が模範学生として育て上げた党員幹部の馬雲香で、彼女は躊躇なく紅衛兵の壁新聞に署名をした。それは苦心して育て上げた学校党支部を苦しい立場に立たせた。さらに 1957 年に大右派分子とされた章乃器の息子である章立凡が単独で学校当局を批判した壁新聞を貼り出し、偶然にも紅衛兵の行動と相呼応した。

## 6 月 8 日：清華附中の応援軍

1966 年 6 月 6 日、市内の北京第四中学校、第十三中学校、そして清華大学の周辺にある八つの大学附属中学校の学生が、次々と清華附中にやってきて紅衛兵に声援を送り始めた。鄭光召によると、「6 月 8 日に学校の西側の体育大学へ行く路上に、黒山のような人だかりが突然現れた。それは清華附中紅衛兵を支持するために自転車で行ってきた 100 名くらいの幹部子弟だった。学校当局はこのような光景を見たことがなかったので、何かが起こることを恐れ、学校の西門を閉めた。すると校門の外は何百人もが集まり、今にも一触即発の情勢だった。」

韓家鰲の記憶では、「学生達が突進してやって来て、人民大学附中の学生とか、北京四中の学生とか、中に薄一波<sup>4</sup>の息子たちもいた。わたしはそのとき党の支部長で、校門の入り口においた勉強机に上り、いかなる行動もすべて学校の指示に従わなければならないと説明した。一部の学生が中へ突き進めと叫び、また、もうやめようと叫ぶ学生もいて、互いに押し合いを」。

当時、教育関係の上層部はすでに清華附中紅衛兵の騒動を通報していたので、各中学校当局は学校内部の反対意見を抑えつけた。しかし、これはかえって紅衛兵の存在を皆に知らせることになった。

宋柏林の 6 月 5 日の日記に別の手がかりが書き残されている。

「王銘が孔原を訪ね、熊鋼が薄一波を訪ね、多くの老幹部<sup>5</sup>に会った。彼らは紅衛兵の行動を断固支持した。」当日、宋柏林の父<sup>6</sup>がわざわざ清華附中に壁新聞を読みに来た。彼は当時解放軍政治大学の政治委員だった。

その後進駐してきた工作組が共青团中央に渡した報告書がわずかに残っている。その資料には次のように書かれた。

「6 月 8 日に学外から紅衛造反派を応援にやって来たのは 300 人余りで、十時間ほど門の中に入れなかった。また、大学側が集めた学生校衛隊<sup>7</sup>が派遣され、海淀支局の私服警察隊を呼び寄せ学生運動を鎮圧しようとした。6 月 4 日に団中央（共產主義青年団の指導部）が事情を調べるため 2 人を派遣したが、大学側に監視され、盗聴された。」

激しく対立した双方（学校当局側と紅衛兵側）は正門の内側と外側にスローガンと壁新聞を貼りめぐらした。第四中学校は清華附中紅衛兵に対聯（対になっているめでたい文句）を贈った。「先駆者は、革命のために、烈士の血をそそげ。後継者は、国を守るために、命をささげる。」

紅衛兵に真っ向から対立するのは、労働者出身の清華附中高三の女子生徒宣夏芳だった。彼女は声高らかに張り出された「××中の幹部子弟宛」の壁新聞を朗読した。「何が紅衛兵というのだ、反動組織の反革命分子だ」、「おまえらの後ろだてはあ

てにならないのだ」、「われらは血で党支部を守り、党を守ろう！」

6月3日、劉少奇と鄧小平が議長を務めた政治局常務委員拡大會議で、団中央書記長・胡克実が北京の小・中学校の文化革命を指導するように任命され、名門校へ工作組を派遣することが決定されていたが、その時清華附中両派の誰もこれを知らなかった。

### 3. 1966年6月中旬から7月末（発展期）：旧体制と工作組

【主なる事件】6月8日に工作組が学校に入り、学校当局の批判をする。革命委員会の成立、紅衛兵と工作組の分裂。6月24日「造反万歳」を打ち出す。7月26日に江青に接見。7月29日に人民大会堂にて毛と劉の対立が表面化。8月1日に毛沢東の清華附中へ返信。

#### 6月8日：工作組が紅衛兵への支持表明

6月8日夜に団中央が派遣した工作組が清華附中に進駐した。工作組は総勢5人で、ほとんどは団中央学校で研修する各省の幹部だった。工作組のリーダーは章建華だが、実際に権力を握っていたのは団中央学校の哲学教室主任の劉晋だった。彼は海淀区中学校の工作組副組長の職を兼務し、2日目の夜、全校大会を召集し、正真正銘の革命組織紅衛兵を明確に支持した。さらに学校側の職権を取り上げると言い渡した。こういう突然の情勢変化は運動場にいるものを愕然とさせ、紅衛兵たちは勝利した気分で「毛沢東思想の指導で偉大なる赤旗の下に団結しよう」と題した壁新聞を貼り出した。

学校の壁新聞は180度の大転換になった。工作組はその後鼻高々に報告した。「現在のところ、全校教師と学生はすでに二千枚にのぼる壁新聞を貼り出し、重要な問題を明るみに出し、党内の資本主義路線に走る実権派を摘発し、妖怪<sup>8</sup>どもの勢いを弱めた。工作組が入校した時保守勢力が強く、革命勢力は弱かった。革命勢力の学生はわずか101人で、学生総数の8%を占め、教師は2名で、教職員総数の1.7%であった。現在、革命勢力の学生はすでに2倍になり、全校生徒数の13.9%を占める」という。劉晋は、四十年後に筆者に次のように言った。「6月8日当時、団中央の実質的な指導者胡克実が緊急電話をしてきて、私に工作組を連れて清華附中に行き紅衛兵を支持させ、每晚9時に直通電話で状況を報告するよう彼に指示した。」

#### 6月中旬：学校当局批判闘争と革命委員会成立

6月17日から20日まで全校は工作組の主宰で万邦儒とその他の学校当局者の吊るし上げを3回やった。劉晋の記憶では、かれは当時「校長万邦儒に対して話し合いだけで暴力は許さない」と明言した。3回のつるし上げ中、万校長は頭を低く下げたが、罪は認めなかった。頬ひげをはやし弁舌で魅力にあふれたユニークな教育家として誰でも認められていた万校長が自分で苦心して育て上げた優秀な学生に批判されるその苦しみは想像できる。

ある二つの大きな出来事が第一回目の吊るし上げに致命的な打撃を与えた。一つは6月18日の人民日報で党中央が大学入試の一時停止を発表した。これは、一流大学受験を唯一の目標にしていた教授子弟を「寝耳に水、一面真っ暗」の気持ちにさせた、周舵は述べている。「自分の持っていた全ての教科書を焼くことまでした。」もう一つは、6月20日、万校長の免職謹慎を発表したことであった。それは、今の運動が一時的だという幻想を消え失せさせた。清華附中の事務を統括する副教務長・邢家鯉も附中批判闘争でつるし上げにあった。

6月21日に全教員・学生大会を召集され、選挙で革命委員会を組織された。しかし工作組が人選においてより多くの割合を要求した時、紅衛兵に反対された。その結果21人の革命委員会の委員大部分は、紅衛兵が中心の構成になり、王銘が主任に当選し、張曉賓、卜大華が副主任となった。その時高得票の当選者幹部子弟が議長席に上がるのを見て、今まで勉強の成績で上位にあった教授子弟は内心想った。「どいつもこいつも顔つきが憎たらしい。」と方位津は述べている。この時工作組の人も、紅衛兵たちは決して人の言いなりになる中学生ではなく、強い権力意識を持っていることに気がついた。工作組は、正統的党組織以外に第二権力の出現を容認するはずがなかった。彼らは個別に紅衛兵を分離し始め、また革命委員会にとって代わる新しい団委員会の設立を計画した。紅衛兵のリーダーたちは円明園へ戻って打ち合わせ会をやった。当時、紅衛兵は工作組のやり方が党中央からの直接指示であるとは知らなかった。6月下旬、胡克実が劉少奇と鄧小平の政治局会議での談話を伝えた。党中央は紅衛兵をコントロールができたと思い、「授業を再開し、革命を続けろ」、「紅衛兵活動を縮小させろ。」との方針を打ち出した

## 6月24日：「造反万歳」

6月23日、団中央発行の『中国青年報』に「左派学生の光栄ある責任」の社説を発表し、革命は工作組の方針に従って団結しなければならないと強調したが、紅衛兵は即6月24日に二枚の壁新聞を張り出し反撃に出た。一枚は「学生の光栄ある責任は徹底的に革命をする」であり、一枚はその後党中央を揺るがした「造反万歳」であった。教学棟の一階、玄関の真ん中に張られたこの壁新聞の最初の言葉は人を驚愕させるものだった。「革命とは造反である！大胆に考え、大胆に話し、大胆に行動し、大胆に突進し、大胆に革命を行う、一言で言えば大胆に造反することである。これはプロレタリア階級の革命家の最も基本的、かつ最も尊い資質である。造反しないのは修正主義である！」この激高したスローガンの文章は、紅衛兵の文才ある駱小海が書いたものであるが、その後文革時代の新しい八股文となった。しかし最後のしめくりは、「現在修正主義の清華附中に対し、このような大造反を起こし、断固対抗するのだ！プロレタリア階級が特権社会に孫悟空のように大騒動を起こすのだ！」当時の人はこれが権力を握った工作組を指していることがすぐさま分かった。しかし、当の工作組は気がついてなかったようで、共産党の支配下で「造反」を提唱するなんて想像もできなかった。狡猾な紅衛兵は故意に一つの抜け穴を残しておいた。つまりこの言葉の出所を伏せていた。工作組は結局騙され、簡単な報告

書で紅衛兵の壁新聞を「反共産党」として上層部に報告し、劉少奇の党中央まで届けた。実際はこの言葉は6月9日の『人民日報』第6面に掲載された目立たない評論「ハンフリーの悲嘆」に基づいていた。それは延安時代毛沢東がスターリンの誕生日の時語った言葉を引用していた。「マルクス主義原理は入り組んで複雑だが、究極的に言えば、造反有理である。」この言葉が片隅にあった論評中の断片的な言葉を暗に示していることに誰も気がつかなかったが、敏感な紅衛兵はすぐにチャンスとしてとらえた。高校一年の紅衛兵・劉剛と張樹平などがこの「造反万歳」の壁新聞を写して清華大学へ持っていた時、ちょうど清華大学の工作組に抑えつけられていた蒯大富にとって強力な支持であった。しかし工作組を擁護する学生は怒を感じ、彼らは清華附中にやって来て「反党、反社会主義の小集団紅衛兵を逮捕」を要求した。

6月26日胡克実が劉晋の報告を聞いたあと、紅衛兵は「世間知らずだ」、「共産党と青年団組織を回復できるか、紅衛兵を党と団組織の中へ溶け込ませることができかどうかと考えた。」（卜偉華の清華附中工作組レポート1966年6月27日付けより抜粋）。その時多くの中学校紅衛兵組織を非合法と宣告され、清華附中は再度世間の注目を集めることとなった。

7月4日に紅衛兵が壁新聞「再び造反精神万歳を論じる」で正式に毛沢東のこの言葉を引用した時、工作組は守勢の状況に引きずりこまれていた。経験を積んだ工作組は突如過激な紅衛兵を排除した団委員会を設立し、紅衛兵が多数を占めた革命委員会に取ってかわって、自分たちが正副書記を担当した。一方、後ろ盾になっている紅衛兵リーダーの保護者を訪ね、手なづけ分裂政策を取った。さらに、7月17日より紅衛兵の中心メンバー208名を一時的に沙城兵營へ移動させ、軍事訓練させた。

## 7月20日：「プロレタリア階級万歳」と批判闘争の拡大

工作組と紅衛兵は対立していたが、学校当局を批判することでは一致していた。全校の批判大会のほかに、各クラスでも教師への批判が始まり、所謂「保守的な学生」にまで拡大した。宋柏林の日記の記録では7月5日に共青团委員会の書記顧涵芬が吊るし上げられ、7月11日にはクラス担任・丁淑慧、7月20日には学生郑国行が批判された。批判闘争は、各クラスの紅衛兵の中心となるグループによって実行された。世間知らずの学生たちは批判闘争会をやるには決して不案内ではなかった。学校当局は学生が入学時に、初めての授業で清華大の「反右派闘争展示会」を見学させていたからだったが、今となっては逆の立場に立たされた。クラス担任は学生たちに取り囲まれ、いかなる弁解をしても、激しい怒声、さらには墨汁、糊までも浴びせられた。宋柏林の日記によると、7月1日に北京大学附中の「紅旗」グループは共産党記念日に「出席者は全て幹部子弟であり、しかも出来る限りカーキ色（軍幹部の古着）の軍服を着用するように厳しい要求を掲げた。」この厳格な身分制による夕べの集いで、初めて「造反の歌」が歌われた。7月20日に清華附中の紅衛兵過激派グループ「斉向東」が「プロレタリア階級の闘争路線万歳」の壁新聞を書



き、全校に放送した。またこの日、彼らは自分のクラスの旧資産階級出身の四人の「保守的な学生」の吊るし上げを始めた。

### 7月下旬：工作組との対決

この時紅衛兵内部に思わぬ衝撃が走った。紅衛兵の最高責任者王銘の父親が批判された。彼は現場に駆けつけ、父を吊るし上げられた大会を阻止した。王銘の父王仲方は失脚された羅瑞卿の公安部事務局の主任につとめていた。胡克実<sup>9</sup>は劉晋にこの機会を利用して清華附中の紅衛兵問題を迅速に解決するよう命令した。

7月24日夜に双方のグループのリーダーたちが教学棟の事務室で対決姿勢に臨んだ。何と言われようがわが道を行く紅衛兵に工作組はこれ以上我慢できず、工作組の叶さんは放送室に飛び込み、紅衛兵の無断放送の原稿を引き裂いてしまった。劉晋の記憶では「このマラソンのような長い論争の最中に胡克実<sup>9</sup>は三度も電話をしてきて、彼に直ちに王銘の問題を取り上げ、紅衛兵の弱点を攻撃し打ちのめせと命令した。」劉晋は幾度か話を切り出したが、その都度やめてしまった。一つには、王銘の支持者が多いこと、二つには、紅衛兵のグループは予想外に団結しているので、名指しで誰を批判したら、たちまち混乱してその收拾ができなくなると彼は思った。劉晋は上司の胡克実<sup>9</sup>の責めと部下の章建華の催促にもかかわらず、何度かテーブルをたたいたが、自分の二十数年の大衆運動の経験をよりどころにして、ついに名指し批判はしなかった。

紅衛兵は論戦のために内部で意見交換をしていた。工作組に弱みを捉まれないために計略的に王銘を第一線から退けた。論戦でト大華は意見を押し通し、張曉賓は反論のため情報を準備していた。細かいことがさらにあった。劉晋が胡克実<sup>9</sup>の電話に呼び出された時、人民大学附中の徐浩淵が駆けつけてきて、ト大華に「団中央はすでに胡啓立<sup>9</sup>を摘発した。」のうわさを伝えた。紅衛兵、工作組ともに相手方の切り札を手に入れたと思ったが、勝負がつかなかった。論戦のあと劉晋は胡啓立<sup>9</sup>が失脚したうわさを胡克実<sup>9</sup>に報告した時、胡克実<sup>9</sup>は紅衛兵のデマだと、劉に精華附中で大会を開きデマを打ち消すよう命令した。

7月27日に三つの事件が発生した。ちょうど北京展覽館劇場の中学生代表大会で報告をしていた海淀区中学工作組の組長・周捷は、慌しく駆けつけた中央文革小組の王力に、その場で罷免を宣告された。清華附中の紅衛兵は「造反万歳を三度論じる」という壁新聞を即座に貼り出した。夜通し寝てない劉晋はこの情勢を見て紅衛兵の批判大会を中止した。

### 7月28、29日：江青、胡耀邦、劉少奇、鄧小平、毛沢東そして紅衛兵

7月28日夜に中央文革小組は北京展覽場の映画館で会議を開き、海淀区の各中学工作組の撤退を発表した。清華附中の紅衛兵・駱小海、鄭桃生はその会議で「革命造反精神万歳」と「革命造反精神万歳を再度論ずる」を読み上げ、壁新聞の原稿と一枚のメモを演壇上の江青に手渡した。そのメモは毛主席への短い手紙であり、「私たちの壁新聞は反共産党だと言う人がいます。どうかお読みになってください。本

当に反党的な壁新聞なのでしょうか。」という。江青はその場で必ず届けると約束し、車に乗る前に紅衛兵のほうへ振り向いて大声で叫んだ。「わたしは君たちを支持する！」

ほぼ同時に胡克実（こくじつ）は劉晋（りゅうしん）、周捷（しゅうせつ）を連れて、西北から北京に治療のために戻った胡耀邦（こようほう）の家に行った。憤懣（ふんまん）やるかたないお客に比べ、胡耀邦は多くを語らずただ彼らの気を落ち着かせ、情勢（せいせい）を聞いた。劉晋によると胡耀邦は胡克実にすぐ鄧小平（とうしょうへい）へ報告（ほうこく）をさせた。その時すでに多くの学校では工作組（くわくさうぐみ）の人を殴（う）ったり、ののしったりして、工作組の追放（しゅうほう）が始まっていた。

胡耀邦の次男・胡德華（ことくわ）は当時清華附中（ちんがふちゅう）の高校一年生だった。彼はその後筆者に次のように語った。父は造反万歳（ぞうはんばんざい）の文章（ぶんしょう）を読んで、私に毛主席（毛主席）の「党八股（だうぱく）に反対せよ」を読んだことがあるかと訊（き）ね、「おまえたちの「造反万歳」なんて、党八股と同じじゃないの。」と言った。

これには当時誰も知らないことがあった。7月南方にいた毛沢東（もうさくとう）は武漢（わくわん）で驚くべき長江横断（ちやうきやうぐわん）の泳ぎをした後、7月18日にひそかに北京に戻った。7月29日に人民大会堂（じんみんだいどう）での革命左派学生（くわくめいさはいがくせい）との接見大会（せつけんたいかい）で、劉少奇（りうせうき）と鄧小平は工作組を派遣（へんしん）したのが適切（てきせき）ではなく、「我（われ）ら老革命家（らうくわくめいが）が新しい情勢（せいせい）についてなかったためだ」と認めた。その後毛沢東は突然（とつぜん）舞台裏（ぶたいうら）から壇上（だんじやう）に上った。張曉賓（ちやうへい）などの清華附中の紅衛兵代表（こうゑいへいだいひょう）は、国家（こくが）の指導者（しうどしや）が一度（いちど）に集まり、太陽（たいやう）が昇（あ）るような場面（ばめん）を目（め）の前にして、暫（しばらく）く信（しん）じることができなかった。

#### 4. 1966年8月初旬から9月中旬権力を握った時期：社会秩序への挑戦

【主なる事件】8月1日毛沢東から清華附中への手紙、8月18日天安門（てんあんもん）での紅衛兵接見（こうゑいへいせつけん）、対聯弁論大会（たいれんべんろんたいかい）と打破四旧（たふしききう）（旧思想（きうしゆしやう）、旧文化（きうぶんが）、旧風俗（きうふうそく）、旧習慣（きうしやうくわん）の打破）、紅衛兵の権力掌握（けんりくさうぎ）、Yの鉄道自殺未遂事件（てつどうじそくみずいじけん）、校内暴力（がういんぼうりき）と劉樹華（りうじゅわ）の自殺（じそく）、8月27日「十項目の情勢判断（せいせいはんぱん）」、大交流（だいきりゅう）。

##### 8月1日：毛沢東が清華附中に送った手紙と紅衛兵の権力掌握

このとき、ちょうど開催中の中国共産党第八期中央委員会第十一回全体会議（ちゆうごくしやんたいはちしきしやうやういひんかいじゅういちかいぜんたいかいぎ）で、毛沢東が8月1日清華附中紅衛兵に送った手紙が配布された。その手紙の中で、毛沢東は清華附中紅衛兵の壁新聞（かきしんぶん）と北京大学附中（ぺいじんぎやうふちゅう）の彭小蒙（へいせうもう）の演説（えんせき）に対して、「強力（きやうりき）な支持（し）を表明（はつめい）した。」これは、文革（ぶんわ）と劉少奇（りうせうき）、鄧小平（とうしょうへい）が派遣（へんしん）した工作組（くわくさうぐみ）に対して、毛沢東（もうさくとう）が初めて紅衛兵（こうゑいへい）支持（し）の立場（たてま）を公（こう）に示（し）すこととなった。

しかし、当時（たうじ）そしてそれ以降（いご）、いまだに清華附中紅衛兵（ちんがふちゅうこうゑいへい）の手には毛沢東（もうさくとう）の手紙（てがみ）はない。王銘（わうめい）とト大華（たうたわ）は、8月3日中央文革副組長（しやうやうぶんわふくさうぢやう）・王任重（わうじんじゆう）のところで手紙（てがみ）の写（うつ）しを見たので、紅衛兵（こうゑいへい）たちが天下（てんか）の宝刀（ほうたう）（最高権力（さいかうけんりく））を手（て）に入（い）れたと疑（う）いはなかった。

清華附中紅衛兵（ちんがふちゅうこうゑいへい）は、独自（どくじ）に権力（けんりく）を握（にぎ）り始めたが、一番（いちばん）年上（ねんじやう）でもせいぜい十八歳（じはちさい）だった。自分（自分）たちの理念（れんねん）で学校（がくこう）を作り直（なお）そうとした彼（かれ）らは、軍事訓練（きんしくんれん）中の紅衛兵（こうゑいへい）を連れ戻（もど）し、「パリ・コミューン（pari・commun）の原則（げんそく）」に基づ（たづ）き、無記名（むきめい）で革命委員会（くわくめいぎひんかい）を改（あらた）めて選（えら）び、

全校生を動員して軍事訓練の服装と装備をさせ、昆明湖を渡り、円明園に行って農作業をさせた。学校を「紅衛兵戦校」と改名し、さらに東北の黒竜江省へ学校を移す準備した。

今まで学業の支えは跡形もなく消え去った。暫く攻撃の対象になった工作組も退場した。紅衛兵は今度は教師と同級生に狙いを定めた。幹部子弟一色の革命委員会のやり方は、一般人出身の発起人の紅衛兵を失望させた。方位津は肉体労働で日焼けした皮膚は赤くなっても自分の出自に黒い影（親が旧知識人や旧資産家など）を消すことはできないと、絶望した。学校移転と騒ぐ混乱状態のなかで、個人身上調書の書類はほとんど遺失した。

しかし、これらの不安はあつという間に社会の「四旧打破」のうねりに埋もれていた。「親が英雄なら子はりっぱな男、親が反動なら子は馬鹿野郎」という叫びは学校の外から突き進んできた。流れの先頭にたっていた清華附中の紅衛兵は、急進主流の外に放りだされそうになった。

#### 8月中旬：「対聯」弁論大会から「打破四旧」

8月6日に北京市内の天橋劇場における「対聯」大弁論会で、理性を主張した清華附中の紅衛兵は市内を一斉管理する「紅衛兵取締り隊」と比べて少数派だった。そこで他の附属中を連合して人を殴ってはいけないという「緊急アピール書」を発表した。しかし、この「アピール書」は共産党第八期中央委員会第十一次全体会議で報告された後、毛沢東に大衆運動を抑制するものだとして批判された。予想もしなかったことだが、聞くところによると、北京四中の紅衛兵取締り隊責任者は党中央高級会議に当時出席していた。さらに彼らは、8月13日に北京工人体育館の大会で清華附中の反対を表明し、「緊急アピール書」を批判する文章「おまえたちはどの立場なの？」を配った。西城区中学をはじめとする多数派は、紅衛兵を殴った不良少年を批判することが重要だと主張したが、清華附中は工作組と団中央批判が大会のテーマであると主張した。最後には投票で採決せざるをえなくなり、清華附中は明らかに劣勢だった。結局最後には教育機関の文革を統括する責任者・王任重が出てきて仲裁し、両派の対立状態をまるくおさめた。大会で党中央を代表する李富春によって胡耀邦をはじめとする団中央書記の「三胡一王」（胡耀邦、胡克実、胡启立、王伟）の停職謹慎を発表された。いわゆる不良少年らは警察に十万人収容する北京工人体育場のトラックへ連行され、ベルトで叩かれたり殴ったり蹴ったりされた。この光景を見た胡徳華は必死に工人体育場から自転車で家に戻ったが、その時父胡耀邦はすでに団中央の紅衛兵に連行された。胡徳華は一夜にして「反革命の子弟」になった。

#### 8月8日：Yの鉄道自殺未遂事件

清華附中の各クラスでは、学生に対する吊るし上げはエスカレートした。高一の女子生徒Yは紅衛兵の繰り返しの吊るし上げに耐えられず、8月8日の夜、窓から飛び出し円明園へ逃げ、その後、五道口で疾走して来る汽車に飛び込んだ。「四人

の郵電学院大の学生が線路を渡った時、身体を折り曲げて丸くなっている人を見つけた。全身血まみれで草むらで転げまわり苦しみ呻いていた…。」汽車の運転手は、白いスカートがまっすぐに向かってくるのを見ると、すぐ緊急ブレーキをかけた。彼女の鉄道自殺未遂の原因については、意見はまちまちである。Yは四十年来一切のインタビューを拒絶しているが、あの夜のことは次のように言った。「大学のいたるところに壁新聞が貼り出され騒がしかった。あの日は、中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定（16 か条）の発表を祝う日だったことを後でやっと知った。わたしはただこの世から逃げたいと思い、静かに誰にも迫害されない所に行きたかった。」

清華附中紅衛兵は、8月16日、団中央を包囲した。夜「胡克実を学校に連れてきた。本来なら団中央で批判するべきなので、賢明なやりかたではなかった」と宋柏林は8月17日の日記で認めている。

## 8月18日：天安門で毛沢東の紅衛兵会見

ト大華の回想によると、8月18日に清華附中の7800人は、真夜中の2時に学校からバスに乗り、天安門で「プロレタリア文化大革命勝利大会」を祝う行進に参加した。当時、首都警備司令部の白という副司令が彼と彭小蒙を天安門に呼び入れ、毛主席が紅衛兵と天安門楼上で写真を撮りたいと告げた。清華附中の割り当て人数は四十人で、一番多かったが、天安門楼に上れるのは27人で、23人は残った。家族には問題がある者（旧地主、資産家など）は、決して上がれないという規定があった。上れなかった者の中には叶僑生がいたが、彼の父は摘発されたばかりだった。王銘は祖父の件で学校に行けなかった。張承志、鄭桃生は地方へ革命経験交流に出かけていた。庶民出身の陶正も上がることが許されなかった。

天安門の楼上はかなり混乱していた。すべての中央指導者が皆そろっていた。周恩来だけが飛び回って皆に歌を歌うように気持ちを鼓舞する一方、毛沢東と写真撮影をするために紅衛兵をいくつかのグループに分けていた。閻陽生と楊小燕は中央へ駆けつけた、「両側にいたのは林彪と劉少奇だった。」閻陽生の其の日の日記には、このような一幕も記録してあった。「私たちは清華附中の学生で、紅衛兵です！」と劉少奇に言った時、劉主席は理解できずに、何度も聞き直した。」あとで分かったことだが、ちょうどその前日、毛沢東は、「司令部を砲撃せよ」<sup>10</sup>と題した壁新聞を発表し、劉少奇はすでに共産党中央部から退かされていた。

以下は宋柏林の当日の日記の抜粋です。

「その時駱小海、宋柏林、韓鈞は毛主席が休憩室に座っていることを突然見かけて、何も考えず中に入り、しっかりと主席の手を握りしめた。わたしたちは清華附中紅衛兵です、毛主席の幾久しい長寿をお祝いしますという、毛主席は長寿にも限りはあるよとおっしゃった。わたしたちへのお手紙を書いてくださいましたか？とたずねた。毛主席はまだ下書きで、きみたちには送ってないな、とおっしゃった。わたしたちは永遠に造反します、最後まで造反します、と言った。毛主席は君たちを断固支持するとおっしゃった。」

二日目、「紅衛兵」の腕章をつけた毛沢東の写真がすべての全国新聞のトップニュースとして発表された。他の学校の紅衛兵の整然とした軍服に比べ、清華附中紅衛兵の色あせた古い軍服（幹部子弟の象徴）は非常に目立った。

## 8 月下旬：校内暴力と劉樹華の自殺

8 月の北京はすでに一種の苛立った熱狂に覆われ始めていた。「破四旧運動」が広がり、群集リンチとなった。その勢いは外国大使館地域にも及ぶようになった。「英国代理公使事務所の焼き討ち」とインドネシア大使館の乱入に清華附中紅衛兵の姿もあった。

8 月 26 日「清華附中式」と呼ばれる学校内の暴力が始まった。宋柏林の当日の日記にも「学校に戻ってから、各クラスで反革命の子弟らを皆、徹底的にやっつけられ、ベルトや竹竿でひっぱたかれた」と記述されている。工作組に指名された「反革命の者」の四人は、亡くなった校長の万邦儒を除く三人について私はインタビューした。

顧涵芬（女、青年団委員会書記長、30 歳）：「予科 651 班の紅衛兵は私の頭の毛を剃って、めちゃくちゃにした。その後、土下座させ、私をつるし上げた。何人かの女子学生は手にベルトを持ち、私を叩き、ベルトとその先でなぐられ、私の左目をつぶされてしまった。」

馮玉中（教務主任、支部委員、38 歳）：「8 月 25 日に五階の大教室で最初のうち口頭で批判されたが、その後暴力に振るわれた。ひどく殴られ、ベルトやベルトの先で叩かれた。」

韓家鰲（党支部書記長、副校長、34 歳）：「学生に贈った辞典が労働者農民の子弟を墮落させたもので、強制的に燃やされたり、わたしの頭を地面におさえつけた。その後、鞭とベルトなどでひっぱたき、ひっぱたいて背中から出血した。」

ほとんどの教師によると最もひどく殴られたのは、万邦儒と劉樹華だった。万邦儒を「反革命」の校長とされ、全身血だらけに殴られ、内臓出血までした。劉樹華は、共青团委員副書記を兼任している物理の教師だったが、以前、彼の私生活についてのうわさを立てていたので、何度もひどく殴られ、精神的な侮辱に耐えられず煙突に登って自殺した。

暴力は学生にまで及んだ。高校 631 組の鄭国行と鄭光召、戴建中などの四人は紅衛兵の宿敵で、暴力がもっともひどかった。鄭光召によれば、「もとは皆一つの派だった。多くの人には自分の立場が悪くなることを恐れ、人を必死に殴ることで敵と決別した革命の意思を表明しようとした。」

## 8 月 27 日：暴力的恐怖の中の「十項目の情勢判断」

暴力的な直接の引き金は、8 月 25 日に市内で紅衛兵を殴られ、殺害されたという噂が広まり、紅衛兵はただちに狂気じみた報復に巻き込まれた。北京では荒れ狂う「暴力の恐怖」に広がり、清華附中紅衛兵の発起人は 8 月 27 日にこの流れに逆らう声明「現状についての紅衛兵の十項目の情勢判断」を発表した。この声明は、全部

で十項目あり、主に暴力に対する反対意思の表明であった。文書は何人かのリーダーが一夜の議論で慌しく決めた。駱小海が最終に内容を取りまとめて書いた。その見出しは卜大華が決定したが、党中央の代わりに先頭に立って、劣勢を挽回しようとする指導者的な態度であった。実際にその前の日、張曉賓と駱小海は釣魚台へ駆けつけ、清華大の文革を担当する中央文革副組長・王任重へ人を殴る事態を党中央に制止して欲しいと要求した。王はそれより紅衛兵たちが自分で話すほうが良いと党中央の意見を述べた。確かに当時北京市内はすでに中学の過激派紅衛兵の天下に成っており、党中央と市の新しい委員会はまったく彼らの眼中に置かれていなかった。

二日目の8月27日に、「十項目の情勢判断」の宣伝ビラが多量に刷り上り、張曉賓は父親の鉄道部から数十台のトラックを調達し、北京市内各地で配り、大規模の宣伝を行った。市内の主流派紅衛兵がこの「十項目の情勢判断」には不満だったが、一般市民の間で大きな反響を呼んだ。宣伝ビラは何度も印刷され、正式公布されたその日に市内各地に貼り出され、そして全国に広がった。しかしながら皮肉なことに、「十項目の情勢判断」の公布された前後、暴力行為が清華附中に激しい勢いでせまり、教師の劉樹華は煙突から飛び込み、高二の女子学生・郭欄恵は服毒自殺をした。

「十項目の情勢判断」に対して、過激派は裏切りであると言い、被害者は偽りだと言った。歴史はこういうものだ。しかし、両派ともにこれは狂気じみた「狂気の八月」の中で暴力を抑制する効果があったと認めている。

## 9月：革命経験大交流と政府機関の無気力

紅衛兵の主流を離脱した清華附中が煩雑な校務を処理するのは容易ではなかった。紅衛兵革命委員会は紅衛兵に全国へ行き火種を広げさせることを決定した。事務机を運動場に移動し、「反革命グループ」と「反革命学生」を除いた全校の教師と学生に対し、革命経験大交流の紹介状に判を押し支給した。九月は以前なら授業が始まる時期だが、清華附中には学生がいなくなり、地方学生の「聖地巡礼」の接待所になった。陶正の記憶では、「党幹部子弟出身の紅衛兵リーダーは次々と地方へ出かけ、私は留守番内閣（中央司令部）になった。私は各学校に招かれ、国防省までへ講演し、人々は私に『毛沢東語録』に署名を頼んだ。皆が大声で「清華附中へ敬礼！」と叫んだ。その時、自分が紅衛兵を代表していると感じた。」

地方の省と市において、清華附中紅衛兵は、造反勢力の応援団になり、また同時に行政機関の後ろ盾になるよう期待された。学校で紅衛兵に吊るし上げされた方位津は、湖北省で「北京紅衛兵の代表と見なし、党の第一書記張体学は私たちを迎え、私を宣伝スピーカーした。当時、紅衛兵が誕生した清華附中に対して国中からあこがれたので、私も一種の誇りを感じていた。」と回想した

清華附中紅衛兵は、あの時確かに各派閥の共同財産になった。劉剛が蒯大富の清華大学造反組織を創設した時「井冈山」と命名するのを手伝ったが、組織の看板は、やはり「紅衛兵」だった。清華附中の各派閥がその後、代わる代わる権力を握って

も、「紅衛兵」という名の下には自分の派閥が明記されていた。「紅衛兵四・四派」のリーダー程金香は姚文元について、アルバニアに「清華附中紅衛兵」の名目で文革時期ほとんど唯一の外国訪問であった。派閥が交替しても学校当局は逃げ延びることは出来なかった。順番に実権を握った各派の紅衛兵は、「学校当局に対する吊るし上げは、自分たちの正当性（革命性）を示すためにますます暴力的になった」と鄭光召は述べている。

その時期、紅衛兵の創立者たちは自分たちの歴史的使命が終わったと感じた。理想に対する幻滅と暴力闘争に対する倦怠感で、「千里の道を行き、万卷の書を読む」と古人のように、彼らは各地を放浪した。宋柏林の日記では長い読書リストに古今東西の書籍が含まれ、王銘は三カ国語を独学し始めた同時に閻陽生と一緒に北京大学のドイツ人のメアリー教授の個人指導を受けた。

## 5. おわりに―客観的記述を次世代へ残す

私がこの100日以降の事項を省略したのは決して紅衛兵に関することが重要ではないというわけではない。それはすでに清華附中紅衛兵の独立性が無くなってしまったからである。「聯動」<sup>11</sup>の成立は古参紅衛兵の瀕死の争いであった。党幹部子弟の特権階級文化は、映画『太陽の少年』（文化大革命下の北京に生きた少年のひと夏の恋を描いた少年の物語）と『血色ロマン』（文革時代を生きた若者たちの友情と愛情を描いた）のような時代に入った。

毛沢東の号令一つで、全ての青年は農村へ送られた。「知識青年」という名のもと、皆荒涼たる辺境の大地で電気もないランプの生活を経験した時、今までの理想とそのための闘争心が瞬く間に消え去った。十年後鄧小平による大学入試復活が彼らを再びスタートラインに立ち戻らせた。「平等」と「競争」は苦難を体験した紅衛兵世代<sup>12</sup>の共通の願いだった。

ある有名大学のアンケート調査では意外にも半数の大学生が再び文化大革命をやる必要があると考えている。あの時代を我々の次世代に忘れないように、客観的な記録を残すのは我々の責任である。

---

### 注

<sup>1</sup>階級路線：革命幹部、軍人、労働者など「家庭出身の良い人」を優遇し、国民党関係者、資本家、富農といった「出身の悪い人」を教育する。

<sup>2</sup>五・一六通知：1966年5月16日付の中国共産党中央の通達。彭真を長とする文化革命5人小組を廃止し、その代わりに陳伯達・江青を組長とする文化革命小組を設けた。この中で王力・聞鋒・戚本禹・穆欣ら極左派は「五一六兵团」と称したが、1967年武漢事件以後、周恩来と毛沢東に反対する罪で追放された。また、これにつながる紅衛兵の極左派を「五一六分子」という。これより、「文化大革命」は文芸批判から政治問題に発展した。「五一六指示」ともいう。

<sup>3</sup>工作組：劉少奇ら当時の党中央責任者が事態を鎮静化するため派遣された。

---

<sup>4</sup>薄一波：国務院副総理、中国共産党中央顧問委員会副主任などを務めた。中共八大元老の一人。

<sup>5</sup>老幹部：1949年の建国前に革命に参加し、党の政策に応じて指導的任務についていた幹部をさす。

<sup>6</sup>宋維軾：政治委員。中国人民解放軍の連隊以上の部隊または独立大隊の政治工作要員。部隊中の党委員会の日常活動の主管者で、軍司令官とともに部隊の首長。

<sup>7</sup>校衛隊：学校側は保守派の学生を使って学校防衛隊を組織した（岩波新書：張承志『紅衛兵の時代』より）。

<sup>8</sup>妖怪：（文化大革命期に）旧地主や旧資本家、学界の権威などをたとえた。

<sup>9</sup>胡啓立：（1929年10月-）第十三期中国共産党中央政治局常務委員で、1989年第2次天安門事件で学生たちに同情的な立場をとったため、全職務から解任された。1951年、北京大学物理学科を卒業し、1956年まで同大学の共産主義青年団書記、全国学生連合会主席を務める。文化大革命期の1966年から五七幹校に下放される。

<sup>10</sup>「司令部を砲撃せよ」「共産党の一部の指導者が、ブルジョア階級の立場から、文化大革命運動を抑圧しようとしている」「共産党中央部の中に、ブルジョア階級の司令部ができてい」と主張。名指しは避けているが、党内でNO.2の地位にあった、劉少奇を批判していることは明らかだった。毛沢東は、自らが推進した大躍進運動が失敗したあと、混乱収集をはかった劉少奇や鄧小平に対する警戒を強めていた。そして、毛沢東が大字報を掲示したことで、劉少奇や鄧小平など「実権派」を打倒する動きが決定的になった。

<sup>11</sup>聯動：「首都紅衛兵聯合行動委員会」の略称。

<sup>12</sup>紅衛兵世代（老三届）：1966年から1968年の三年間に中学・高校に在学した人は一回り若い世代に混じって大学生となった。

## 作者略歴

1947年11月山西省陽城県にて生まれる。本籍は山西省臨県磧口鎮。

1982年北京建工学院（大学）都市行政学部卒業。その後ドイツに留学し都市生態と企業管理を学ぶ。清華附中卒業後、労働者、農民、兵士、学生、商人を経験。

閻 小妹（信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授）

上條 和恵（信州大学 人文学部 社会人受講生）

2018年1月12日 受理    2018年2月5日 採録決定